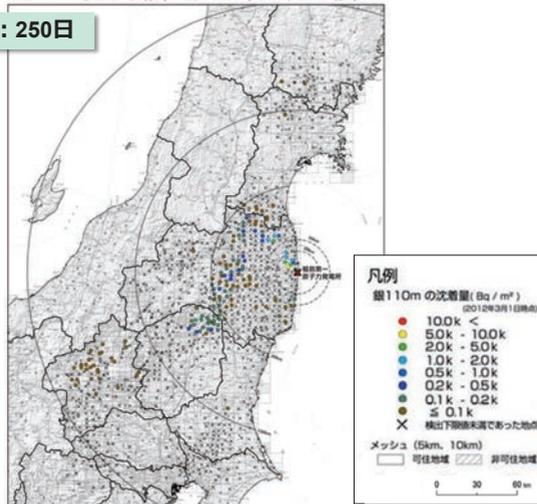


銀110m (広域)

銀110mの土壤濃度マップ (平成24年3月1日時点)

半減期 : 250日



Bq/m² : ベクレル/平方メートル

文部科学省報道発表 平成24年9月12日

平成23年12月から平成24年5月にかけて行われた土壌調査では、福島県を中心とした東日本の広い地域において、可搬型ゲルマニウム半導体検出器を用いた in-situ 測定（下巻P23、「セシウム134, セシウム137 (広域)」)により、放射性核種の土壌沈着量が測定されました。

平成23年6月に行われた国の土壌調査では、東京電力福島第一原子力発電所から100km圏内及びその圏外の福島県西部の土壌試料を採取し、γ (ガンマ)線放出核種 (放射性セシウム、ヨウ素131、テルル129m、銀110m) について核種分析が実施されました。

その結果、テルル129m (沸点1,390度) 及び銀110m (沸点2,348度) が比較的広範囲に検出されました。

本資料への収録日 : 平成25年3月31日

改訂日 : 平成28年1月18日

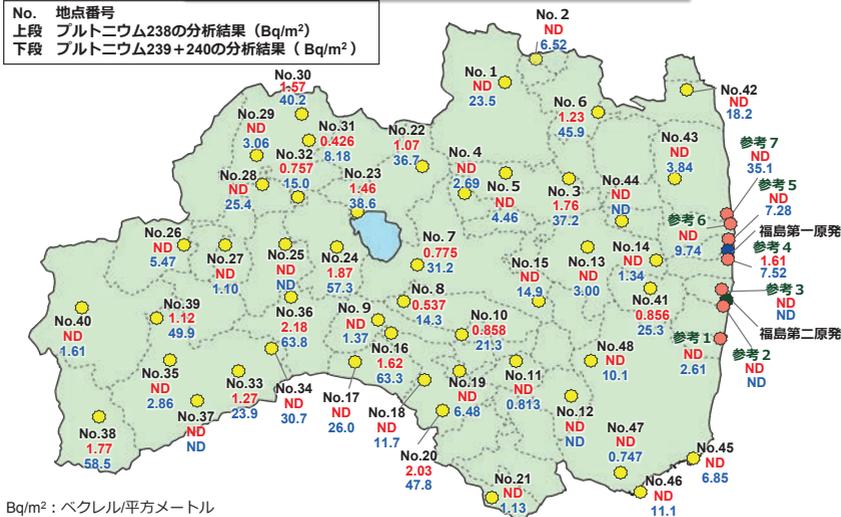
7.9
その他の放射性物質の沈着状況

その他の放射性物質
の沈着状況

プルトニウム（福島県）

プルトニウム238、239+240の分析結果（土壌）

No. 地点番号
上段 プルトニウム238の分析結果 (Bq/m²)
下段 プルトニウム239+240の分析結果 (Bq/m²)



平成24年4月6日 原子力災害現地対策本部（放射線班）、福島県災害対策本部（原子力班）資料より作成

「福島県における土壌の放射線モニタリング調査計画」に基づき、平成23年8月10日～10月13日に採取された県内の土壌について、プルトニウム238、239+240の分析が行われたところ、調査地点（48地点）については、放射性物質が全て事故発生前の国内の調査結果の範囲内であったこと、プルトニウム238とプルトニウム239+240の比率が事故発生前の全国平均（0.0261）とほぼ同程度の比率であったことから、事故由来のものではないと考えられています。

なお、東京電力福島第一原子力発電所周辺の参考調査地点（7地点）のうち、1地点（大熊町夫沢）については、プルトニウム238とプルトニウム239+240の比率が0.214と全国平均（0.0261）より一桁高い比率となっていることから、東京電力福島第一原子力発電所の影響の可能性が考えられます。

本資料への収録日：平成25年3月31日

改訂日：平成28年1月18日